



『花をけなしといやすのは何の訳があるのやうと
思い当たるともおす時々の
月影のお姿を思い出して
お気の毒ではおすもの
おかしうなるのでござりました。』

「末摘花」の巻より

ものあはれ —源流—の旅

言葉の国日本―「ことば」はその土地の独特の気候風土が育んだ感性によって紡がれたものです。複雑で微妙に移ろいゆく京都の自然は当然そこに住む人々の心に影響しました。

平安の時代、物語はもともと読むものではなく聴くもので、語りの担い手は高位の女官「女房」でした。千年の昔京都で生まれた源氏物語を「今女房」が京ことばで語ることに、気候風土のもたらす発想の息吹そのものが「音」となって響いては消えるその中に、源氏物語の底に流れる「ものあはれを」くみ取っていただけの事を願います。

山下智子 プロフィール

京都市出身。仲代達矢主宰無名塾に学び、三島由紀夫近代能楽集「道成寺」

「熊野」は、舞台、TVにて活動。2003年より声の表現中心に活動。NHKラジオドラマにレギュラー出演と作品提供。朗読劇、映像番組、文楽人形芝居での語り、電子辞書、大修館書店国文教科書CD等での朗読。
「京ことば源氏物語」の女房語りを通し、失われゆく美しい京ことば、やまとの心を後世に伝えるべく各地で語り会をひらき国内のみならず海外でも好評を博している。
<http://www.genji-kyokotoba.jp/>

国文学者・中井和子先生に学ぶ

氏は生粋の京女。府立大学で中古文学の教鞭を執りながら十五年の歳月をかけて源氏物語全五十四帖を今から百年程前の京ことばに全訳されました。失われつつある京のことはや感性を後世に残すために源氏物語ほど相応しいものはなかったと、一人の京都人として誇りに思います。2009年1月永眠。



第六帖 末摘花

夕顔の儂い死を忘れられない源氏は、大輔の命婦から、亡き常陸宮の姫君が琴を唯一の友に

寂しく暮らしているという噂を耳にする。
朧の月夜、姫をこっそり訪ねる源氏の後をつける頭中将。二人は姫の弾く琴の音に耳を澄ます。秋、容易になびかない姫とやっと契りを交わした源氏だが、その恥ずかしがるばかりの世間離れた様子に落胆し、足が遠のいていく。
雪の宵の頃、ようやく姫を訪ねた源氏は、古女房達の寒さに震える零落した暮らし振り、翌朝雪明かりに見た姫のあまりの醜貌に驚くが、かえって姫に対する憐憫の情がつのり、後見することを心に決める。年の暮れ、姫から贈られた古びた衣裳に源氏は呆れる。

正月七日の夜常陸宮邸を訪れ、源氏が贈った新しい衣裳のお陰で多少女らしくみえる姫に逢うが、見事な黒髪のお姫の顔を彩り咲き匂うのは紅くのびた鼻なのだった。

開催場所 つきよみルームについて

日本最古の河川水運として、奈良時代から1300年問人々の暮らしを支えてきた京都・保津川。その上流部、亀岡市千代川町にある「川の駅・亀岡水辺公園」つきよみルームは、保津川の自然や歴史、文化、環境を学ぶことができる施設です。

地域の歴史を体感できる展示や映像資料、保津川を眺めながらゆったりと過ごせる語らいの休憩スペースなど、地域住民の憩いの場として親しまれています。また、ヨガ教室や各種ミーティング、音楽イベントなど、市民に幅広く利用されています。

春、満開の桜の下、目の前にはふるさとの山々。川のせせらぎを聴きながら、ここ、「つきよみルーム」で源氏物語の世界をごゆっくりとお楽しみ下さい。



川の駅 亀岡水辺公園



全五十四帖連続語り会 京ことば 源氏物語 女房語り・山下智子

第六帖 末摘花の巻

令和六年
四月七日(日)

場所 つきよみルーム (川の駅・亀岡水辺公園内)

開演 午後二時〜四時 (開場午後一時半) 展示 御室流華道 十二時より

料金 三千元 (要予約) 四十名 (椅子席)

定員 四十名 (椅子席)

御室流華道
御室桜で知られる、総本山仁和寺を創建された宇多天皇を流祖として伝承されている華道流派です。
桜満開の時期に桜を中心とした生け花と、源氏物語第六帖末摘花にちなんだ、紅花の生け花を展示させて頂きます。

アクセス：JR千代川駅北口徒歩2分 京都縦貫道千代川インターから3分 駐車場あり (20台無料)



お申し込み、お問い合わせ
こちらの問合せフォームからお申込み下さい。
0771-24-2168
ゲストハウス舞舟 <https://kyoto-maishu.com/>

- ◆主催 舞舟源氏物語の会
- ◆協力 II トラスト・ジャパン 千葉秋風
- ◆音響 II 蓑田毅 ◆展示 II 御室流華道 生け花
- ◆後援 II 亀岡市 かもか霧の芸術祭 京都新聞

